音楽文化コース、ピアノ⑥

近・現代ピアノ作品研究

音楽教育・森山　伸

１．授業の概観

受講者数　４名

ピアノ⑥では、近・現代のピアノ作品を取りあげて授業を行った。受講生は、すでにピアノ①～④でバロック時代からロマン派までの作品を研究している。前期のピアノ⑤では、同じく近・現代のピアノ練習曲を中心とした作品の授業を受講している。

授業で取りあげた作品は以下の通りである。

ラフマニノフ	楽興の時　作品１６－１
ラヴェル	水の戯れ
スクリャービン	作品９－２
プロコフィエフ	ソナタ　第１番
グリーグ	ピアノ協奏曲
ラフマニノフ	ピアノ協奏曲第２番
ドビュッシー	喜びの島
メトネル	作品３８－６

上記の曲以外に、研究室主催の公開演奏会出演のための曲も取りあげた。

ショパン	スケルツォ第２番
	バラード第４番
	ソナタ第３番
	練習曲作品２５－１２
リスト	ハンガリー狂詩曲第１２番

これらの曲は、学生の希望した楽曲でロマン派の作品であるが、演奏技術と表現力の向上のために例外的に取りあげた。

授業で取りあげた作品は、いずれも受講者の希望する曲であり、指導者との協議を経たものである。

授業の目的は、表現力の向上である。表現を実現するための、技術の具体的な問題点を見究めて、円滑な演奏を目指すことにある。

受講者は、それぞれ手の大きさに差異はあるものの、小さめであり、ピアノの演奏に際しては、困難を生じることも多い状態である。譜読みに際して、もっとも重要なのはフィンガリングである。ピアノのレッスンは全員が幼少時から受けており、大学入学時までの技術を変えるには、大きな努力が必要である。ピアノ①～⑤においてもフィンガリングの指導を続けてきているが、ポジション移動を円滑に行えるために、近現代の作品を研究する意義を受講生はしっかりと感じ取っている。

譜読み以降の授業においては、音色作りが重要な課題になるが、受講生はすでに基礎知識として、音色とタッチの関係は学んでいる。アンサンブルとしてピアノの楽曲を捉え、音色をイメージしタッチの決定をすることの重要性を受講生は理解し研究に努めているが、無理のないフィンガリングと上体と腕の関節を活用した演奏技術の獲得には、未だ到達していない。次年度の卒業研究に向けての課題として、更なる研究が望まれると共に、個々人の手の大きさを自覚させるための徹底した指導の必要性を強く思っている。

２．授業の評価

今年度の授業で取りあげた作品は演奏技術の向上という目的には適うものではあるが、近現代の作品に多く触れて知識と理解を深める為には、更に多くの地域、時代に関連する昨品を取りあげ研究すべきであると思われる。しかし、広い知識よりも受講生自身の演奏課題に直結した楽曲を取りあげることにより、今後の受講生の発展に役立つ授業になるのではないかと考えられる。

３．授業アンケート

アンケートは授業の進め方、同一課題曲の設定、授業に対する要望等について行った。

共通する要望として、レッスン時間をもっと長く取ってほしいという意見が出された。

現在はグループレッスンの形態を取っているため、一人一人のレッスン時間の配分を同じにすることは困難である。他の受講生のレッスンに対する捉え方について、授業開始時の説明不足による誤解があるように思われる。しかしグループレッスンのメリットも感じて受講生もおり、聴講時の受講生とのコミュニケーション方法に検討の余地がある。次年度への課題としたい。公開演奏会に対しては、全員が良い経験になったという意見だった。ピアノは元来、人のために演奏するのが自然な姿であるので、演奏会に向けての相互協力や、個人の努力等、得難い経験は今後の音楽活動に良い影響をあたえると思われる。
同一の課題曲の設定については、意見が分かれた。同一の課題の方が評価し易いのは当然ではあるが、受講者の身体能力と演奏能力に合った曲を選択した方が、技術の向上に相応しいと思われる。更に検討したいと思う。

４．まとめ

４名の受講生が全員まじめに研究に取り組み成果を得たことには満足している。しかし、幼少時からの積み重ねたピアノ演奏技術の改善の困難さも痛感している。受講生は、自分の演奏技術に対しての冷静な判断が難しいため、音楽的で優れた演奏に導くための指導を更に工夫したいと思う。実技レッスンとして取りあげられない楽曲や優れた演奏に対する感性を伸ばすために、ＣＤやＤＶＤ等を活用しての指導を積極的に取り入れてゆきたい。アンサンブルの楽器としてピアノを捉えた場合、ピアノ以外の声楽、器楽、オーケストラ等に対する理解力が必要であるため、ピアノ作品以外の楽曲についての理解が深まるような授業の展開も、検討すべきと考えている。